

駒井壽太郎	雨宮源兵衛	林	閻	田中文輔
横澤米太郎	石原光三	矢島榮助	名取忠愛	
寺田喜平治	石田民藏	大澤伊三郎	石氏兵作	

功勞者及優遇者

市の公益に關して功勞顯著なりし者及滿十五年以上市の名譽職に在りたる者に對し市は功勞者表彰規程なる者を設けて其の功勞を旌表して居るが、猶別に功勞者優遇の途を開いて該表彰規程に當らざる名譽職勤續者等を優遇して居る、開市以來の功勞者及優遇者は左の通りである。

若尾逸平	若尾民造	佐竹作太郎	野口英夫
森田恒	大木喬命	寺田忠三郎	尾澤親
末竹清右衛門	高見澤重興	小田切幸七	野澤宗辰

穴水嘉三郎	山本伊作	星野嘉兵衛	雨宮源兵衛
宮澤房藏	秋山文七	石田民造	駒井壽太郎
青柳定兵衛	河内又兵衛	中山嘉右衛門	淺川平八
駒井孫作	小澤政兵衛	鈴木銀造	成島治平
石氏兵作	牛山儀助	寺田喜平治	横澤米太郎
大澤伊三郎	(以上功勞者)		

中澤彌兵衛	大木善右衛門	林	閻	朝比奈平治
小田切清重	高橋與次	芹澤藤左衛門	田中文輔	
田澤通弘	鈴木彦七	中澤紀	早川三郎	
星野芳二郎	布能喜太郎	玉越米二郎	平原庄兵衛	
石原光三	鶴田逸策	矢島榮助	山口治郎兵衛	

(以上優遇者)



商業會議所議員

故若尾民造、故佐竹作太郎、大木喬命の三氏が商工業の進歩發達を圖らんため甲府商業會議所の創設を發企し、他の商工業者の有力なる人々と協議して其の設立認可を申請し、官の認可を得て之を創設した上第一回の議員選舉を行なつたのが明治四十二年の春であつた爾來選舉を行なふ事數回、或は再選された人もあり、或は三選された者もあり、其の當選者は總て左記の人々である、之等は皆實業家の精、若は商工業者の粹であるから人物地理上に於ける一人一家として山巒の突兀、河水の奔流に對比すべき者であらふ、初期以來の當選者は

- 佐竹作太郎 村松 甚藏 小田切久藏 奥村正右衛門
- 平原 傳八 寺田忠三郎 土屋 愛造 坂本 豊甫

- 田中文輔 矢嶋 榮助 太田 源七 牛山 儀助
- 石原 光三 末竹清右衛門 岩田 吉助 高野孫右衛門
- 田中 代甫 山口治郎兵衛 輿水 新七 丸茂 彦作
- 矢崎房二郎 大澤伊三郎 大木 喬命 今井茂右衛門
- 芦澤朝二郎 小池半二郎 成島 治平 篠原仲太郎
- 石田幾太郎 若尾 民造 横澤米太郎 山本 彗二郎
- 小澤喜兵衛 星野嘉兵衛 朝比奈平治 山本 瀧藏
- 樋口 半六 早川元兵衛 淺川 友造 細田 武雄
- 八田 達也 平原長太郎 名取 忠愛 竹村益二郎
- 奥村 恒吉 小澤政兵衛 嶋 佐 吉 保坂藤左衛門
- 石田 民藏 寺田喜平治 鈴木音兵衛 芝海 庄太郎
- 石倉 作藏 飯島 保行 大木善右衛門 福田九右衛門
- 百瀬 幾彌 杉山 幸男 堀内 正順 秋山 喜藏



○加藤菊二郎 ✓長田貞太郎 ○雨宮惣右衛門 ✓田沼惣七  
 ○丸茂和重郎 ✓丸茂平兵衛 ○奥村徳太郎 ✓若尾謹之助  
 ✓大森國平 ✓武田興十郎 ○若尾富二郎 ◎石原彦太郎  
 の七十二名で、最初會頭に若尾民藏、副會頭に大木喬命が推薦され  
 て大正六年まで勤続したが、同年四月の改選に際し會頭に若尾謹之  
 助、副會頭に成嶋治平の兩人が薦擧された、然れど若尾が辭任した  
 ので寺田忠三郎が其の後任に推選された、初期以來常議員に選任さ  
 れたのは佐竹作太郎、矢島榮助、田中文輔、成島治平、石原光三、  
 横澤米太郎、細田武雄、寺田忠三郎、石田民藏、大木善右衛門、丸  
 茂平兵衛、若尾謹之助等の諸氏で、初期以來功勞若は名望ありし商  
 工業者として特別議員に推擧されたのが若尾逸平、八田達也、内藤  
 文治良、大木喬命の四人である、父子相傳して議員に選任された者  
 は故若尾民藏、同謹之助父子、故平原傳八、同長太郎父子の二氏で

あるが、初期の議員たりし石田幾太郎が退任した後には父の民藏が選  
 出されたのは選舉界の珍事である。

## 地味

昔は錦町外三十六個町だったが現今約百個町の多數  
 に上つたのは先年上府中、飯沼、稻門等の各所を併  
 合した結果だけれ共其の地積が掌大の小天地だから

地味の肥瘠を區別するは無用の業に屬するやふだが過去の経過及現  
 在の状態に依りて其の分類を行なふば、先づ第一に山田町を推して  
 膏腹第一の良土とせねばならぬ、山田町は多額納稅者若尾、名取の  
 二人を有し、貴族院に若尾逸平を送り、若尾の女婿璋八を衆議院に  
 送り、若尾逸平、石氏兵作、田中文輔の三人を縣會に送り、市長に  
 は若尾逸平、同民造、名取忠愛の三名を擧げ、市會議長には若尾民  
 造、石氏兵作の二人を擧げた、故に市内に於ける富と人物との淵藪  
 であることは確固不動の事實である、柳町では石原彦太郎を縣會議



員及衆議院議員に選出し猶同人を市長に擧げ、且多額納税者たる松浦儀兵衛を有して居る、緑町は多額納税者にして貴族院議員たりし矢島榮助を有し、横近習町は縣會議員及衆議院議員たりし大木喬命を有し、太田町には縣會議員にして參事會員たる森田恒あり、和田平町には縣會議員たりし寺田喜平治及寺田忠三郎あり、新柳町には縣會議員たりし高見澤重興あり、城屋町には縣會議員たりし星野嘉兵衛あり、八日町には縣會議員たりし中澤紀及清水彌五右衛門あり、愛宕町には縣會議員たりし林紋治郎あり、百石町には縣會議員に三選せられて正副議長の榮位に就ける野口英夫あり、若松町には縣會議員たりし大澤伊三郎あり、白木町には縣會議員たる保坂政治郎あり、穴切町には縣會議員たる三枝治郎あり、錦町には縣會議員たりし關善治あり、飯田町には縣會議員たりし河野美高あり、其他に猶小田切謙明、佐竹作太郎、島田樸藏、中村昌等の所屬不明な者もある

る、林間は今佐渡町に居住するに共紅梅町に居住した時縣會議員に選舉されたのだから紅梅町居住と爲すを適當とせん、要するに舊上府中、飯沼、稻門の如きは人物を選出すること僅少若は絶無なるゆる地味瘦瘠、土地礮确と見るべき地區であらふ。

## 産物

甲府は人物の淵藪だから従つて多數の人物を生産輸出して居る、然れ共其の人物は多く經濟的方面乃至實業界方面に偏倚して智的、靈的、武的方面に活躍する人物の落寔を感じるの蓋し物質の進歩に依つて繁榮を爲せる都市の産物として當然の成果を現はせる者であらふと思料される、大正五年十月時事新報社が調査して公表した全國五十萬圓以上の資産家表を一瞥すれば小池國三が三百五十萬圓、若尾彰八が百萬圓、前川太兵衛も又百萬圓、佐竹源造が七十萬圓、穴水要七が五十萬圓と評定されて居る、小池は少時若尾家の養成を受けて壯年に迫んで



から東京に居を定め獨立營業を開始して今日の致富成功を爲したの  
である、此の成功に就ては若尾の庇蔭を受けた惠徳も少々ではある  
まひ、若尾彰八の成業も又舅家の輔導に依れる事が其の大因を爲し  
たのであらふ、穴水は幾多の浮沈、幾多の曲折を経て今日の富を造  
つたのだが、其の成功の裡面には先輩援引の恩恵が潜んで居ると云  
ふ事だ、畢竟風雲に際會すると云ふ事は先進先覺の士の援引を受く  
る事を意味するのかも知れぬ、然るに中西惣三郎が先進の庇護をも  
受けず、先輩の援引をも受けず、苦學螢雪の功を積んで司直の判官  
と成り、而して地方裁判所の刑事部長に榮進した功業は當今の惰青  
年を奮起せしめ、當今の懦夫を起たしむるに足る活模範たらふ、甲  
府市出身の司法官は中西の外に東京控訴院判事遠藤誠あり、長野地  
方裁判所検事櫻田忠美あり、稅務監督官に原田宗藏あり、公立中等  
學校長に石原初太郎あり、武官に歩兵少佐高橋毅あるのみである、

乍然高橋は既に現役を退ひて北越に閑居して居る、武人として望を  
囑するに足るのは海軍機關大尉の現職に在る青年士官戸坂雅吉位の  
者だらふ。(大正六年十月稿)

結

論

地質

黨界の名士が熱血を濺ひて築き上げた難攻不落の堅  
固な地盤も、或る魔力の一撃に粉碎さるる脆さ弱さ  
は宛然巨人が下した大鐵槌の爲めに粉微塵に擊破さ  
るる蟻垤の脆弱に等しき者である、政界の傑物が肝膽を碎ひて築き  
上げた勢力範圍が、假令金城湯池の如き堅鞏不動な者であつても、  
或る魔物の指頭が觸るれば直ちに動搖を生ずる其の態は、恰も彼の  
老大な百日紅が指頭の微觸に依つて全幹に動搖を生ずると同様な景  
状である、這は魔物の魔力が人力を超越して居る爲めでは無く、黨



人の勢力が魔物の魔力に對して餘り微少羸弱な故ではあるまじか、故に黨人を訓練して黨力を培養し、而して魔物の魔力と對抗し、若は之を威壓するに足る勢力を養成しなければ政黨勢力の發展を企求する事が出來ぬ、政友派の領袖が臺閣に列する時は政友會が議會の絶對多數を保てども内閣の顛覆と與に倏ち其の勢力を失墜し、大隈内閣の治下に絶對多數を保つた憲政會が寺内内閣の出現に依つて其の勢力を滅耗せる過去の經過に徴すれば、政黨の權威が何物をも値えせぬ事實を發見する事が出來るでは無ひか、夫だから政客黨人は充分に黨力を培養し、充分に黨基を堅造して晨に夕を測る可らざる蟬蛸の如き境地を脱却せしめねば不可ぬ、抑も地方の政狀は中央の政狀に攀縁して其の變遷を生ずる者だから、黨勢消長の事因及權力推移の理由が總て中央政界に緊切の關係を有して終始其の徑行を同ふする者である、民黨の盛んな明治廿五年の第二回總選舉には淺尾

藥袋、加賀美の三人が當選して吏黨の古屋專藏が敗軍の將となり、自由、改進の兩黨が合同して憲政黨を組織した時には、其の勢力が全國を風靡して明治三十一年の第六回總選舉には同黨の推薦に係る齋藤、河口、秋山の三候補に對して戟を逆しまに爲る者が無かつた此の頃までは黨人原の意思が健全で、元氣が潑刺だつたから魔物の魔力に枉屈するを屑しとせず、大に磊塊の氣を吐いて魔物の墨下に肉薄した者である、然るに黨人原の元氣が漸次銷磨したのか、又は力を以て闘ふよりも智を以て勝つを賢とする利害の觀念が發達した爲めか魔物の魔力を藉りて黨の羽翼を張んとする氣習が盛んになつたから漸次黨人の堅剛な意氣精神を銷糜して了つた、明治三十二年の秋執行された縣會議員選舉に當選した人々の黨色を檢すれば進歩派二十名、政友派六七名、中立三四名と云ふ區別だつたから役員選舉の勝利者は無論進歩派であらふと豫期された處、其の結果は意外



にも政友派の勝利を壽く事となつた、蓋し其の當時の知事が政友會出身だつたから役員選舉に官權の力を用ひた事は無かつたかと猜した者もあつたが、若し凭る事狀があつたとすれば數名の進歩派議員が官權の軍門に降伏した事實を否定する事が出来ぬ、明治三十五年八月執行された第七回總選舉に郡部から政友非政友各二名宛を退出したのは郡部に於ける兩派の勢力に優劣の無ひことを証明した者であるが、全年三月執行された第八回總選舉に郡部から矢張政非各二名宛を退出したのは依然兩派の勢力が前狀を維持した者であると認むべく、全年秋執行された縣會議員選舉に政友派が勝を占めたのも矢張前狀維持と認むべき者だけ共、明治三十七年三月執行された第九回總選舉に郡部から政友一名、非政友三名の代議士を退出したのは實に政黨勢力の大變化であると云はねばならぬ、其の當時に於ける周圍の事狀が政友派に對して不利益のあるべき理由が無かつた

のに政友不利の惡結果を現はしたのは其の當時に於ける各派の實勢力を赤裸々に發揮した者では無からふか、明治四十年の縣會議員選舉には政友派が依然多數の議員を退出したけれ共非政友派に役員の椅子を分讓したのは政友派の退嬰萎縮を表現した者では無く、郡内膺懲の爲め非政友派に餘肉を與へた公道會の苦肉策であつた、明治四十一年五月執行された第十回總選舉に郡部から政非各二名宛の代議士を退出したのは兩派對等の舊狀に復した事實の説明と認むべく又明治四十四年の縣會議員選舉が政友派の勝利に歸し、全四十五年五月執行された第十一回總選舉の結果が依然前狀を維持したのは依然兩派の勢力に消長の無かつた事實を説明する者であらふ、大正二年の春政友派の領袖廣瀨久政が時事に感じて政界を引退した爲め全派内に大恐慌を生じた時、天外より來れる一種の魔力が同派に屬せる早川、星野、田中、青柳、依田の五縣議を誘惑して同會を遁逃せ



しめ、而して其の當時の少数派であつた同志派と聯契せしめたから明治三十二年來十五箇年間、長く久しく失意の地位に在つた同志派が俄に昇天の勢を得て政友派を掩撃し、之を窮地に陥れて多年鬱屈せる意氣を伸暢する事が出来たのである、爾來形勢一變して政友派遂に振はず、爾來主客顛倒して同志派が優勝の地に就たのは實に俯仰回頭して轉た今昔の感に堪るぬ次第である、大正三年政友派の大幹事古屋專藏が復た政界を脱して政友會を脱退したから失意不遇の政友派は愈々益々蹙軻落魄の悲境に陥り、古屋の後を承けた總務森國造等が公道會を中堅として僅に其の頽勢を維持して居たのみであつたから大正三年十一月執行された衆議院議員の補缺選舉には隊伍を整えて參戰する事も出来ず、九郡の天地を敵騎の蹂躪に委したから同志派の宇佐美一寶が殆ど満点の大多數を以て當選の榮を擔ふ事となつたのである、大正四年三月廿五日第十二回の總選舉が行はれ

た時、同志派は郡部に於て根津、市川、望月の三候補を擁立して從來の記録を破り、精銳を盡して政友派を威嚇したから政友派は憤恨措く能はず、牛田、伊藤の二候補を推して之に對戦した、如何に萎微不振の政友派とは云ふ、同志派が三候補擁立の危険を敢てしたから二候補を以て之と争ひ、而して善謀善戰する處あらば同志派の一候補を倒すこと格別難事ならじと觀測されたが、其の結果は意外にも牛田が末位を以て漸く當選圈に入つたのみで、政友派の全投票を合算しても同志派の一望月に及ばなかつた、實に悲痛慘憺たる者では無ひか、全年秋十月執行された縣會議員選舉には同志派が十七名の多數を選出せしめたのに政友派は僅に五名、只僅に五名の縣議を選出せしめたのみであつた、勢力失墜も又甚しひでは無ひか、黨勢不振も又甚しひでは無いか、故に正副議長は同志派に占得され、參事會員の多數も又同志會に領有され、而して縣會の主權が確實に同志派



の掌握する處となつた、然るに大正六年の初春しよしゆん執行された西八代郡選出縣會議員の補缺選舉には政友派の堀内隆規が當選して同志派の栗原一郎が失敗した、西八代は同志派の全盛な處であるから同志派の必勝を豫測されて居たのに意外にも反對の結果を現はしたのは地利人和の天時に及ばざる事實の影像では無ひか、全年四月の第十三回總選舉に同志派が三名の立候補を躊躇して望月、河西の二候補のみを擁立したのは蓋し天時の不可なる所以を悟得した故であらふ、天の時を得たる政友派は牛田、生原の二候補を擁立して堂々逐鹿戦を開始し、尙別に藤田胸太郎が獨立運動を開始したから五候補馳突の戰狀實に凄絶慘絶の極であつたが其の結果は同志、政友各二名を出だし、而して獨立候補の藤田が敗軍に終つたのは政黨の勢力を發揮した政黨主義の勝利であると誇稱する者があるけれ共政黨消長の因由が何れに胚胎するかを研究したならば黨基の堅築、黨人の訓練

等に尙多大の努力を拂はねばならぬ事が必要缺く可らざる事實では無からふか、過去に於ける内閣及び地方行政官の變遷と黨勢消長の相伴隨せる經過とを回想すれば、蓋し思ひ半ばに過ぎる事があるだらふ。

## 地勢

縣下十五人組の多額納稅者から選舉されて貴族院議員になつた大福長者は甲府の若尾逸平を最先第一人物として、次が南巨摩の小林小太郎、次が中巨摩の廣瀬和育、次が東八代の網野善右衛門、次が中巨摩の内藤宇兵衛及市川文藏、次が甲府の矢嶋榮助で其の次に選舉された北巨摩の網藏平輔が現に其の在職中である、上記八名の名譽者中若尾と小林の二名は既に其の天壽を完して白玉樓中の人となつたが廣瀬は老來ちうらい矍鑠として其の意氣壯者を凌ぎ、網野も高齡だけれ共非常に老健で東八代の重鎮を爲し、内藤は機會に乗じて風雲を叱咤せん雄心を藏し、



市川や矢嶋や網藏は尙長き前途を有して大に雄飛活躍すべき餘地を存するのみならず、政治界、實業界、經濟界等に有要歟く可らざる重要な人物だから人物地理上に重きを爲す必要な人物である、來年七月は貴族院議員の改選期だから當選の光榮を擔ふ名譽者は何人であらふか、而して其際此の光榮者を互選すべき十五名の大福長者は何人であらふか豫め之を逆睹する事は出來ぬが多分前回の顔觸と格別の大差は無からふ、大正四年四月に網藏が選舉された時の多額納税者は左の諸氏であつた。

多額納税者（大正四年四月調）

- 金三萬千三百七十二圓七十五錢五厘 若尾民造
- 金五千八百六十四圓五錢五厘 根津啓吉
- 金三千九百三十七圓八十八錢 小林八右衛門

- 金三千七百七十五圓四十七錢 秋山源兵衛
  - 金三千六百七十六圓八十八錢五厘 大森慶二郎
  - 金三千六百六十六圓四十一錢 市川文藏
  - 金二千九百八十一圓八十一錢五厘 網藏平輔
  - 金二千七百六十一圓三十三錢五厘 廣瀬和育
  - 金二千五百四十二圓七十一錢 矢島榮助
  - 金二千三百五十一圓八十三錢五厘 加賀美東一郎
  - 金二千八百八十四圓十九錢 網野善右衛門
  - 金二千五百五十四圓廿二錢五厘 内藤宇兵衛
  - 金二千四百四十三圓二十六錢五厘 松浦儀兵衛
  - 金二千二百二十二圓四十一錢 奥山兼作
  - 金二千百十四圓八十一錢 名取忠愛
- 右の内若尾、加賀美の二人は前に白雲に駕して昇天されたが、若尾は



嗣子謹之助、加賀美は嗣子授一が家督を相續したから此の二人が各其の亡父に代つて入選するだらふ、歐洲大戰の影響が此の山深き甲州の天地にも侵入して經濟界や事業界に非常の激變を與ゑたから各人の富や資産にも多大の變動があつた模様だけれ共上記した前年の多額納税者は皆な一列一体に其の納税率を増嵩して來年の多額納税者中に併進するだらふ、衆議院議員の當選者は左の諸氏である。

衆議院議員當選者

- 第一回 明治廿三年七月一日
  - 第一區 七百七十三點 八 卷 九 萬
  - 第二區 二百九十二點 ✓ 田 邊 有 策
  - 第三區 二百九十七點 古 屋 專 藏
- 第二回 明治廿五年二月十五日
  - 第一區 九百二十三點 淺 尾 長 慶
  - 第二區 三百八十五點 藥 袋 義 一
  - 第三區 三百二十九點 加 賀 美 嘉 兵 衛

- 第一回 明治二十七年三月一日
  - 第一區 八百六十四點 齋 藤 卯 八
  - 第二區 五百四十四點 依 田 道 長
  - 第三區 五百九十八點 加 賀 美 嘉 兵 衛
- 第二回 明治二十七年九月一日
  - 第一區 千九百九十八點 石 原 彦 太 郎
  - 第二區 六百十八點 依 田 道 長
  - 第三區 五百二十二點 加 賀 美 嘉 兵 衛
- 第三回 明治三十一年三月五日
  - 第一區 千八十一點 小 林 七 朗



第二區 八百四點 ✓河口善之助  
 第三區 六百七十七點 藥袋義一  
 第六回 明治三十一年八月十日  
 第一區 千六百十點 齋藤卯八  
 第二區 八百九十七點 河口善之助  
 第三區 四百九十七點 ✓秋山元藏  
 第七回 明治三十五年八月十日  
 市部 二百三十九點 佐竹作太郎  
 郡部 二千二百六十九點 廣瀨久政  
 同 千六百二十六點 藥袋義一  
 同 千六百二十一點 ✓望月小太郎  
 同 千四百三十八點 ✓長澤市藏  
 第八回 明治三十六年三月一日

市部 大四百四十六點 佐竹作太郎  
 郡部 千七百七十四點 廣瀨久政  
 同 千七百五十五點 望月小太郎  
 同 千二百六十二點 長澤市藏  
 同 九百五十六點 菊島生宜  
 第九回 明治三十七年三月一日  
 市部 四百十七點 佐竹作太郎  
 郡部 千四百三十點 根津嘉一郎  
 同 千二百十點 廣瀨久政  
 同 千百九十四點 天野董平  
 同 七百七十二點 望月小太郎  
 第十回 明治四十一年五月五日  
 市部 七百四十九點 佐竹作太郎



郡部 二千二百七十五點 森 國太造  
 同 二千五百五十五點 根津 嘉一郎  
 同 二千三十六點 天野 小董平  
 同 千九百六十五點 手塚 正次  
 第十一回 明治四十五年五月十五日  
 市部 九百三十點 佐竹 作太郎  
 郡部 二千八百六十五點 根津 嘉一郎  
 同 二千三百五十五點 市川 文藏  
 同 二千四十點 堀内 啓治  
 同 千八百二點 手塚 正次  
 補欽選舉 大正三年十一月廿五日  
 郡部 六千六百五十六點 宇佐 美八一 寶  
 第十二回 大正四年三月二十五日

市部 八百六十五點 大木 喬命  
 郡部 三千四百八十七點 望月 小三郎  
 同 二千二百七十三點 市川 文藏  
 同 千九百十八點 根津 嘉一郎  
 同 千五百八十八點 牛田 唯  
 第十三次 大正六年三月二十五日  
 市部 六百六十一點 若尾 彰  
 郡部 二千二百四十五點 望月 小太郎  
 同 千九百六十六點 河西 豊太郎  
 同 千八百四十點 生原 忠右衛門  
 同 千七百十三點 田 唯  
 即ち總選舉を行なふこと十三回、補欽選舉を行なふこと一回、兩者併せて十四回の當選者が總勢五十四人の多數だけれ共佐竹、望月の



二人が五選され、根津が四選され、藥袋、廣瀬、加賀美の三名が三選せられ、齋藤、河口、依田、長澤、天野、手塚、市川、牛田の八人が各二選せられ、其の他の十五名が各一回宛當選したのだから代議士として議會に出入した現人は僅に廿九名の少數を僂算するのみである、其の内藥袋、齋藤、石原、天野、田邊、佐竹、小林、長澤の八名は前に既に物故し、菊島は横濱に移り住みて縣事に關係せず加賀美は江湖に放浪して縣事に何等の交渉を持たぬから縣の内外に在りて直接間接縣事に關與し、相當の勢力を有して相當の地位に在る者は僅々二十名に過ぎぬのである、縣會議長は縣會の首腦にして縣會を代表すべき名譽の榮職だから其の選に入る者は當時の縣會に傑出して他に卓越せる勢力を有する有力者であらねばならぬ、此の榮職に擧られたのは最初が南巨摩の近藤喜則で明治十二、十三の二年勤績し、次に北巨摩の八卷九萬が明治十四年から同廿三年まで勤

績し、同廿四年には中巨摩の三枝七内が就職し、全廿五年から三十年まで木内信春、同卅一、卅二の兩年は東八代の加賀美東一郎、同卅二年から三十五年まで甲府市の野口英夫、三十六年は東八代の廣瀬鶴五郎、三十七年から三十九年まで中巨摩の手塚正次、同四十年から四十一年まで甲府市の林間、同四十二年から四十三年まで南都留の牛田唯一、同四十四年から大正三年まで北都留の藤田胸太郎等が順次相踵で就職し、而して大正四年の新縣會議長に選舉されたのが東山梨の飯嶋知貞である、副議長には依田孝、木内信春、野口英夫、加賀美東一郎、齋藤卯八、寺田忠三郎、中澤徳兵衛、楨田吉藏、手塚正次、堀内哲太郎、秋山源兵衛、小林龜麿、石原盛平、堀内源太郎、内藤永喜の諸氏相踵で當選し、常置委員及參事會員には八卷九萬、木内信春、藥袋義一、渡邊信、牛田八郎、金丸平甫、三枝七内、相川傳一郎、高木忠雄、加賀美平八郎、淺尾長慶、田邊有榮、天野



董平、遠藤太右衛門、加賀美東一郎、根津嘉一郎、百瀬誠一郎、依田孝、穴水朝二郎、廣瀬和育、上野忠善、小林源三郎、山縣昌吉、清水有文、秋山喜藏、山口嘉平、西川重豊、古屋卯三郎、新津隼人、渡邊孝治、新海榮太郎、廣瀬鶴五郎、牛田唯一、宮川義汎、飯嶋信明、望月繁、矢澤覺、長谷川彌兵衛、藤田胸太郎、小林友益、渡邊兵二郎、小林小六、横山善十郎、曾根勘左衛門、標肇、程原誠一、小林佳雄、堀内啓治、窪田徳能、新津眞、乙黒武十郎、山本武彦、石原直太郎、保坂治左衛門、小野美太郎、坂本英智、後藤善四郎、田中文輔、小川清貴、青柳徳太郎、星野勝陳、早川安吉、金丸平甫、早川助重、岡常貴、内藤永喜、田邊七六、小尾保彰、戸嶋祐太郎、望月傳十郎、森田恒、小林喜作、細田英一郎、田中董策、樋口半六、塚原水二郎、植松延寛、柏木繁、伊藤辨二郎の諸氏が前後相踵あひついでで當選した、政黨方面では山梨同志會の總務委員が市川文藏、河西豊太

郎、秋山源兵衛、飯嶋知貞、小林八右衛門、小林喜作、網藏平輔、望月小太郎、根津嘉一郎、宇佐美一實の十名で其の内市川が總務委員長、河西、秋山、小林(八)、小林(喜)の四名が常任總務委員の職に在り、松谷録郎、小宮山内義、長田暎、根津啓吉、土橋孝、秋山喜藏、有泉米松、小林彦太郎、小林龜麿、齋田五朗、古屋卯三郎、窪川松二郎、上矢近太郎、武井勘一、小尾濱吉等が會内の有力者若は名望家として政界に重きを爲して居る、政友派では石原盛平、若林弘毅、田中董策の三名が常任幹事として黨務總攬の要衝に當り、其他に岡部兵吉、柏木繁、希代宏、田邊七六、樋口懋郎、川手甫雄、久保寺匡正、齋木逸造、堀内隆規等の普通幹事を置き、尙其他に依田道長、廣瀬久政、河口善之助、堀内啓治、森國造、廣瀬鶴五郎、飯嶋信明、中澤徳兵衛、金丸宗之助、後藤善四郎、望月繁、小尾朝雄、林間等の諸豪を相談役若は顧問に推薦して置く、要するに顧問



及相談役は同派の元老連で幹事には新進氣鋭の士を網羅したのである、尙此の他に長坂丈左衛門、小野美太郎、小野元兵衛、早川善太郎、上野忠善、小川清貴、岡常貴、山中美發、小俣寛三、渡邊兵二郎、小林友益、渡邊瑳美、關本勘左衛門、曾根勘左衛門、藥袋宗二郎、内田信一郎、二宮大作、丸茂要作等の群雄が四方に傲嘯して居る、國民黨員としては上矢喜平治、三木慎爾等の二三氏を算するのみだが之等の諸士は寧ろ不偏不黨の中立と見るのが適當だらふと思はれる程の現状である、中立には古屋專藏、山本武彦、宮川義汎、乙黒武十郎、藤田胸太郎、宮川千之助、細野英一郎、中田正治、小尾保彰、戸島祐太郎、宇佐美二寶、淺尾長慶、青柳徳太郎等の諸氏あり、何れも當代に重きを爲して政界の風雲が動くたび毎に其の一舉一動を注視されて居る、尙ほ此の他に一人の注意すべき怪人物がある、丹は望月鶯溪の股肱たる原準太郎である、原は自己の闊達を

求めず、其の肝膽を碎き、其の智囊を搾り、而して政友望月を輔翼するに其の全力の傾倒して居る、望月が五回代議士に選舉され、最近二回引續いて最高点を得たのは専ら原が參劃の功である、教界に於ては身延の小泉日慈僧正が日宗の高僧として法威を全國に揮ひ、惠林寺の棲梧寶嶽和尚、摺山の勝部敬學和尚、慈照寺の大森禪戒和尚、長生寺の仲麿祖仙和尚等が桑門の名僧若は學僧として佛教界に重きを爲し、神職界に於ては一の宮の小山祀夫宮司が神職及國學者として高名を馳せ、雅人としては小澤眠石、歌人としては名取忠愛及夫人正代子並に櫻井義令、詩人としては有泉芦堂、野澤靜所、俳人としては松本守拙、山田藍々、飯田蛇笏等が夫々高風を現はして居る、事業家の天才としては雨宮利作、近藤脩孝の二人を推算し得らるのみだらふ、雨宮は專攻的の學識も無く、又學習した技能も無く、獨得の研究心と天賦の凝念とを以て重石鑛を發見した鑛業界の



偉勳者である、現今甲信兩國に跨る金銀銅重石鉛鑛二千萬餘坪の大鑛區を採掘せんが爲めに千万圓の大採鑛會社を設立せん計畫中である、後者も又水力電氣事業に天稟の鬼才を有し、北海道や栃木縣や本縣等に於て幾多の水電事業を企畫經營した才物である、故に兩宮は鑛山王と稱せられ、近藤は水力王の偉名を擅まゝにして居る。

### 地味

東山梨郡は多額納稅者として根津啓吉、奥山兼作の二名を有し、衆議院議員として田邊有榮、依田道長、廣瀬久政、菊島生宜、根津嘉一郎、森國造の六名を出し、且つ現任生原代議士の所有者である、縣會議長には飯島知貞、全副議長に中澤徳兵衛を出し、縣參事會員には田邊、根津、上野、飯島、矢澤、標、窪出、小野、小川、岡、田邊、田中の十二名を出し、黨人として同志會總務飯島知貞、根津嘉一郎、政友支部幹事田中董策、田邊七六、樋口愨郎の三名を所有し、中央黨系會議員とし

て小野元兵衛を選出して居る。

□西山梨は曾て淺尾長慶を衆議院に送り、縣參事會員に淺尾長慶、早川安吉の二名を出し、同志會常任幹事に上矢近太郎、政友支部幹事に久保寺匡正を出し、帝國農會議員に深澤平重を選出して居る。

□東八代は多額納稅者として大森慶二郎、網野善右衛門、加賀美東一郎の三名を有し、貴族院議員として網野善右衛門、衆議院議員として古屋專藏、加賀美嘉兵衛、宇佐美一寶等を挙げ、縣會議長として加賀美東一郎、廣瀬鶴五郎の二人を出し、副議長として加賀美東一郎、石原盛平、縣參事會員として加賀美平八郎、全東一郎、山縣昌吉、古屋卯三郎、廣瀬鶴五郎、曾根勘左衛門、小林佳雄、早川助重の八名を出し、黨人としては同志會總務宇佐美一寶、政友支部幹事石原盛平を所有して居る。

□西八代は一人の多額納稅者も無く一人の貴族院議員も無く、只藥



袋義一を衆議院議員に選出したのみである、縣會議長は一人も選出せず、只副議長として依田孝、堀内源太郎の二名を選出したのみである、縣參事會員には渡邊信、藥袋義一、依田孝、秋山喜藏、山本武彦の五人を出し、政友支部幹事に若林弘毅を出して居る。

□南巨摩は多額納税者として小林八右衛門、秋山源兵衛の二人を有し、貴族院議員には小林小太郎を挙げ、衆議院議員には秋山、長澤、望月の三人を出し、縣會議長には近藤喜則、木内信春の二名、全副議長には木内信春、秋山源兵衛の二名を選出し、參事會員には木内信春、遠藤太右衛門、望月繁、石原直太郎、星野勝陳、望月傳十郎、樋口半六の七名を薦舉し、同志會總務委員に秋山源兵衛、小林八右衛門、望月小太郎の三名を推薦して居る。

□中巨摩に在る多額納税者は市川文藏、廣瀬和育、内藤宇兵衛の三名で何れも皆既に貴族院議員に選舉され、衆議院議員には齋藤卯八

手塚正次、市川文藏、河西豊太郎の四名を選出し、縣會議長には三枝七内、手塚正次の二名、同副議長には齋藤卯八、手塚正次、内藤永喜の三名を挙げ、參事會員には三枝七内、金丸平甫、穴水朝二郎、廣瀬和育、西川重豊、新津隼人、新海榮太郎、長谷川彌兵衛、横山善十郎、新津眞、保坂治左衛門、青柳徳太郎、金丸平甫、内藤永喜、塚原水二郎の十五名を出し、同志會總務委員に市川文藏、河西豊太郎の二人を薦舉してある。

□北巨摩は網藏平輔が多額納税者として現に貴族院議員在職中である、衆議院議員には八卷九萬、小林七朗の二人を挙げ、縣會議長には八卷九萬、同副議長に堀内哲太郎を出だし、參事會員に八卷九萬、百瀬誠一郎、清水有文、宮川義汎、小林小六、乙黒武十郎、坂本英智、小尾保彰、戸島祐太郎、植松延寛の十名を薦舉し、同志會總務委員に網藏平輔、政友支部幹事に川手甫雄が推薦されて居る。



□南都留郡には一人の多額納税者も無い、従つて一人の貴族院議員も無い、衆議院議員には河口善之助、堀内啓治、牛田唯一の三人が薦擧され、縣會議長として牛田唯一、同副議長として榎田吉藏を擧げ、參事會員として牛田八郎、相川傳一郎、小林源三郎、渡邊孝治、牛田唯一、小林友益、渡邊兵二郎、程原誠一、堀内啓治、小林喜作、柏木繁の十一名を出し、同志會總務委員として小林喜作、政友支部幹事として希代宏、柏木繁の二人を選出して居る。

□北都留郡には一人の多額納税者も無く、又従つて一人の貴族院議員も無い、衆議院議員に天野董平、縣會議長に藤田胸太郎、同副議長に小林龜麿を擧げ、參事會員に高木忠雄、天野董平、山口嘉平、後藤善四郎、藤田胸太郎、細田英一郎、伊東辨二郎の七名を薦擧した。

□甲府市は若尾、矢島、松浦、名取等の多額納税者を有し、貴族院議員として若尾逸平、矢島榮助の二名を出し、衆議院議員として石

原彦太郎、佐竹作太郎、大木喬命、若尾璋八の四名を推選し、縣會議長に野口英夫、林間を擧げ、同副議長に野口英夫、寺田忠三郎等を選出し、參事會員には田中文輔、森田恒の二人を出し、政友支部幹事に齋木逸造を擧げ、中央黨系會議員に矢島榮助を選出して居るのである。

## 面積

土地の廣袤面積は總説に於て詳述を経た通りであるが、人物の多寡を廣袤とした人物地理上の面積より見れば、土地の面積に比較して若干の異違ある事を確認せざるを得ない、乍併多錢能く買ひ長袖能く舞ふ、戸口の多い處の方が多數の人物を輩出して居ることは否定することの出来ない事實である、先づ其の大体に就いて郡市人物輩出の状況を表記して見やふ。



富豪及政客郡市別集計表

郡市別	多額納税者	上院議員	下院議員	縣會議長	同副議長	同參事會
東山梨	二	〇	七	一	一	二
西山梨	〇	〇	一	〇	〇	二
東八代	三	一	三	二	二	八
西八代	〇	〇	一	〇	二	五
南巨摩	二	一	三	二	二	七
中巨摩	三	三	四	二	三	五
北巨摩	一	一	二	一	一	〇
南都留	〇	〇	三	一	一	一
北都留	〇	〇	一	一	一	七

甲府 四 二 四 二 二 二 二  
 合計 一五 八 二九 一二 一五 七九

之の分率比較をして見るも一興だから試みに多額納税者を六十個、上院議員を四十個、下院議員を百個、縣會議長を六十個、同副議長を四十個、同參事會員を百個とすれば總個数が四百となる、之を各郡市に分率すれば左表の如き結果が現はれる。

郡市人物四百分率比較表

郡市別	多額納税者	上院議員	下院議員	縣會議長	同副議長	同參事會員	計
東山梨	八	〇	二四	五	三	一五	五五
西山梨	〇	〇	五	〇	〇	三	八
東八代	三	五	二	一〇	五	一〇	五三



上記の如き結果を現はしたから更に之を百分率として土地の面積と  
 対照して見やう。

人物土地百分率比較表

郡市別	人物		土地		人物土地 比較増減
	百分率	百分率	百分率	百分率	
西山梨	八〇	二一五	一〇〇	五五	六六
南巨摩	八〇	二一五	一〇〇	五五	九四
中巨摩	二八	一四一	一〇〇	八八	一八七
北巨摩	四〇	一七七	五五	三三	一三三
南都留	〇〇	一一二	五五	三三	一四三
北都留	〇〇	一五五	五五	三三	一九九
甲府	一六	一〇七	一〇	五五	三三
東山梨	五五	一三七	二二	九七	△一、七

郡市別	人物	土地	人物土地 比較増減
西山梨	八	二、〇〇	四、八八
東八代	五三	一三、二五	五、三六
西八代	一六	四、〇〇	一〇、三四
南巨摩	四	一三、〇〇	一二、五五
中巨摩	七七	一九、二五	九、四六
北巨摩	三七	九、二五	△九、七九
南都留	三三	八、二五	一六、〇三
北都留	三三	五、五〇	一五、八一
甲府	五五	一三、七五	一三、四七
東山梨	五五	一三、七五	〇、一三

比較増減欄中△印を附したのは土地よりも人物の面積の方が廣  
 ひ符牒である。

即ち土地の面積は北巨摩が一番廣くて南北都留及南巨摩の諸郡順次  
 之に次ぎ、甲府の如きは殆ど彈丸黒子の小天地に過ぎぬけれども人



物を廣表とした郡市の面積は中巨摩を第一として東山梨、東八代、甲府の二郡一市之に亞ぎ、夫れから南巨摩、北巨摩、南都留、北都留、西八代と云ふ順位に序次降下して西山梨を最末の等位に置く事となる、而して土地の面積よりも人物の面積の方が比較的廣大なのは甲府、中巨摩、東山梨、東八代の一市三郡で其他は何れも土地の面積の方が廣大である。(大正六年十月稿)

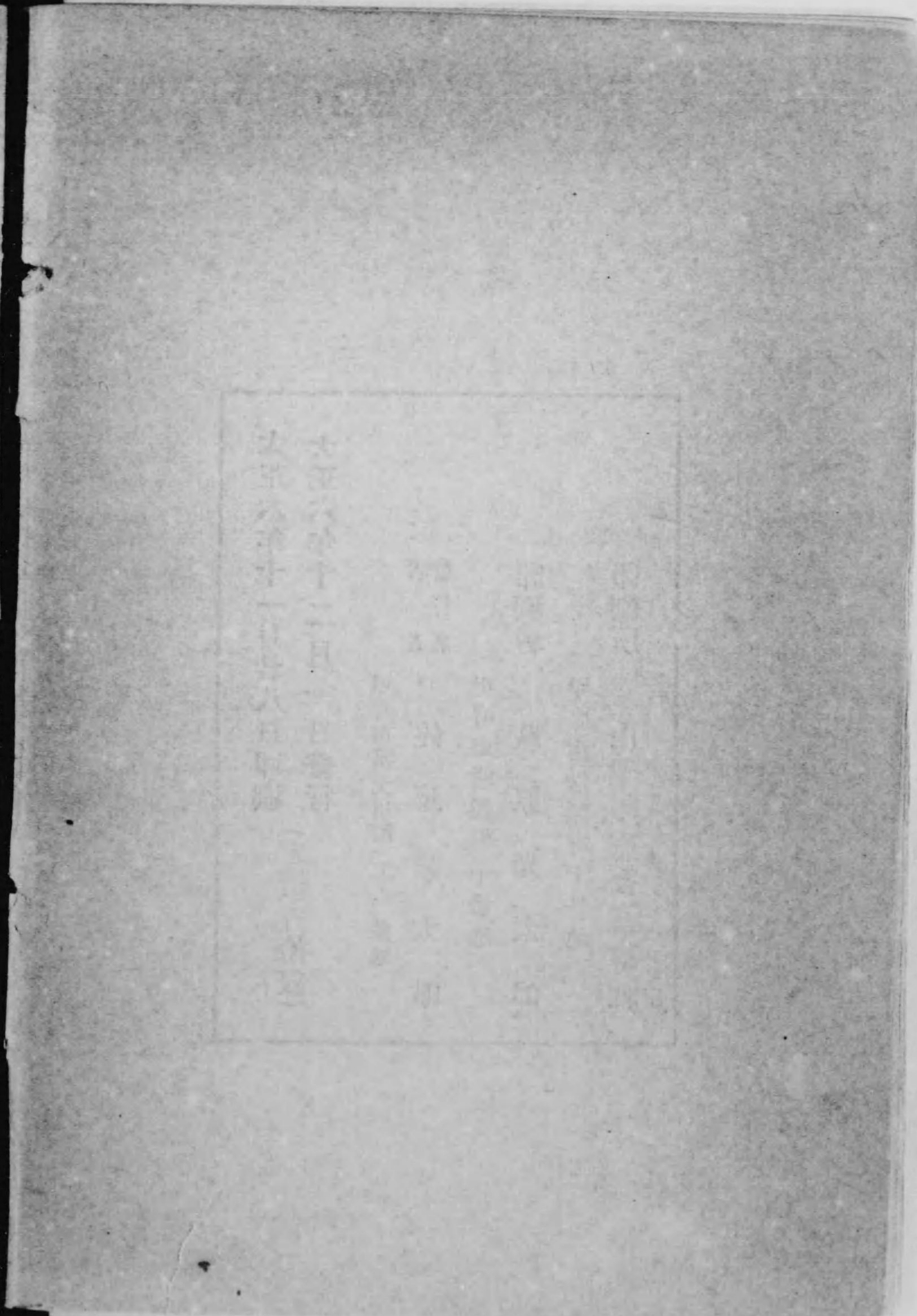
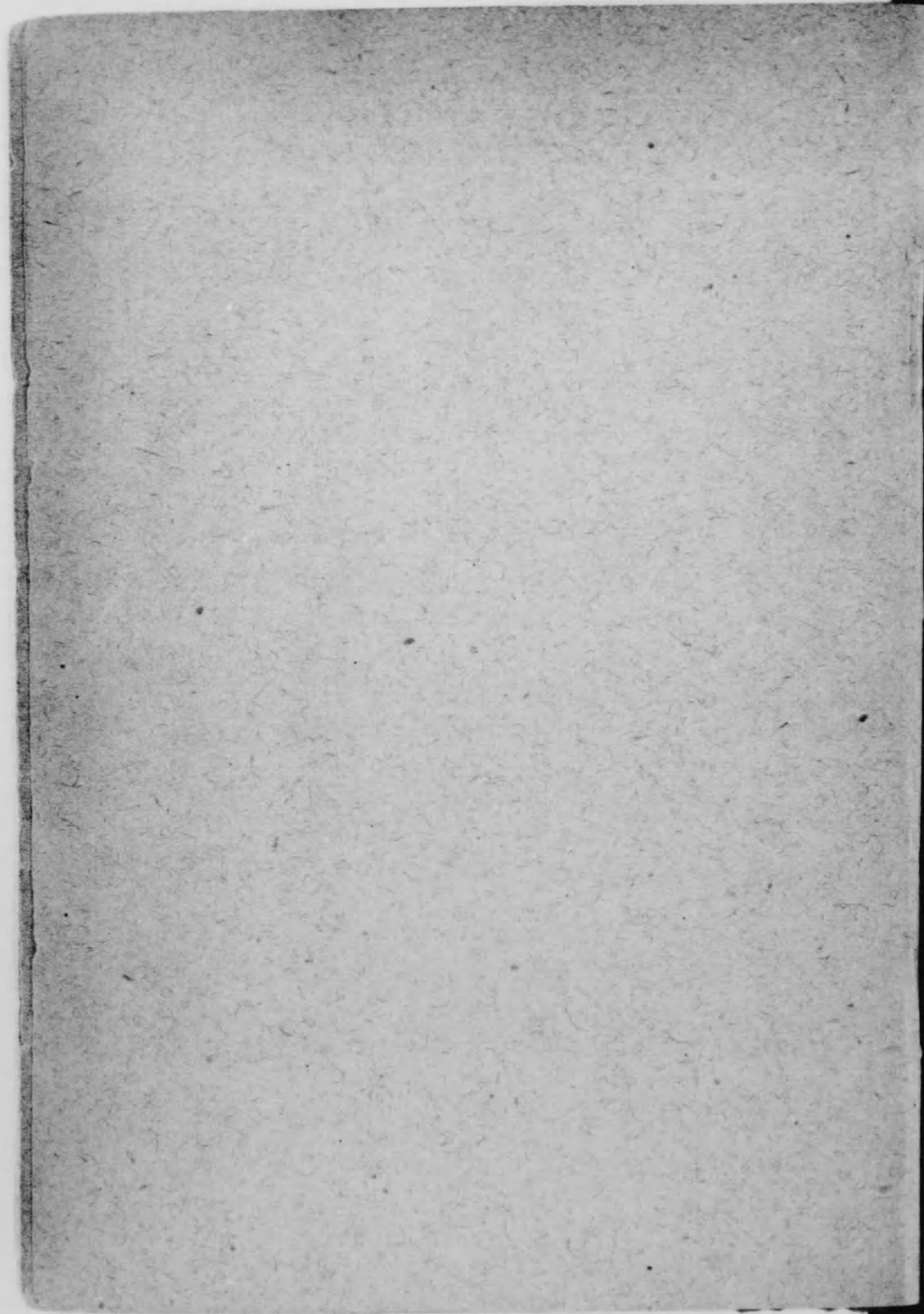
大正六年十一月廿八日印刷  
大正六年十二月一日發行  
(定價五拾錢)

著者 甲府市富士川町二十二番地  
發行者 佐藤源太郎

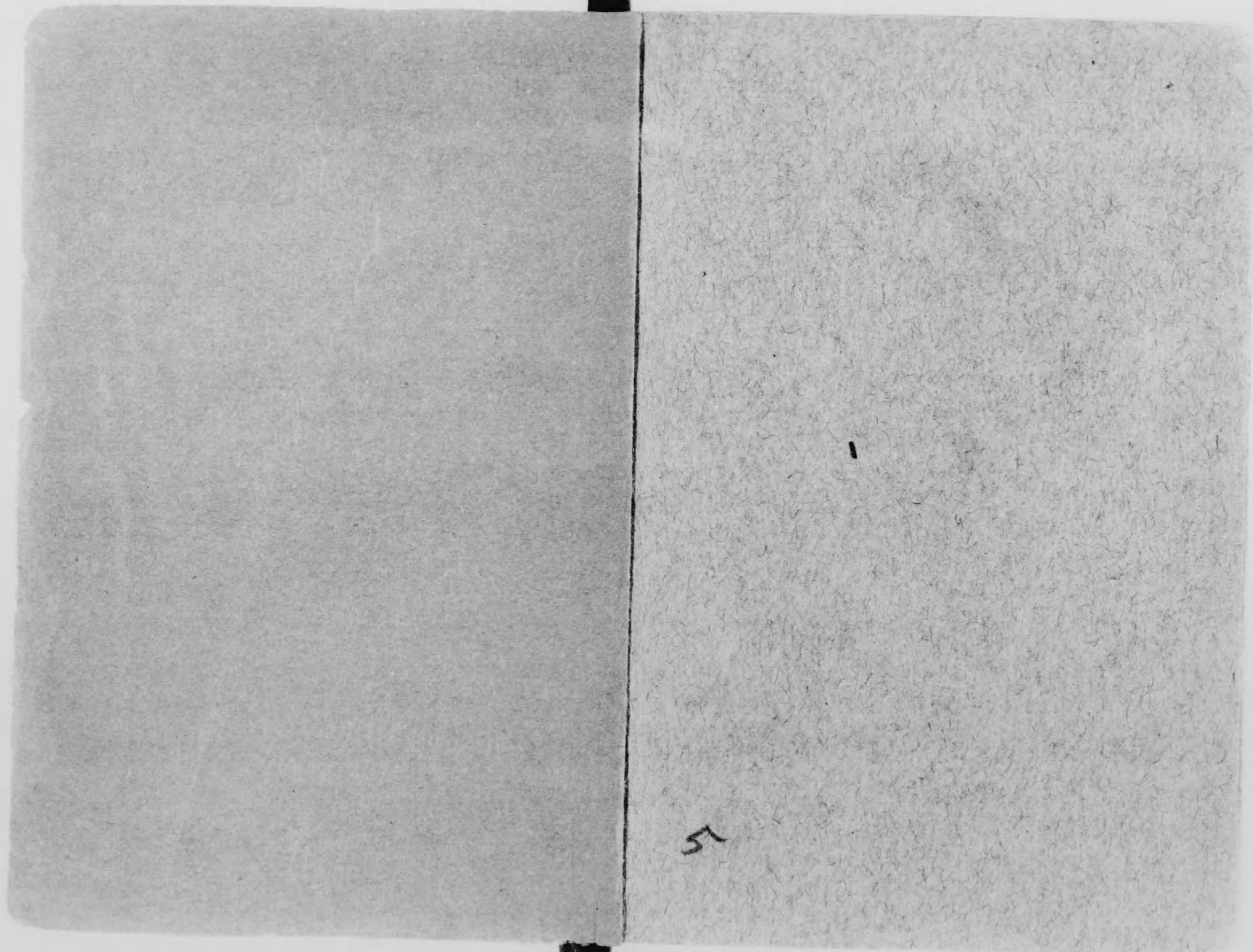
印刷者 甲府市常盤町十番地  
萩原光太郎

印刷所 甲府市常盤町十番地  
山梨印刷合資會社









5



364
349



終